

みつくら

令和 8年 8月15日 第464 編
集 「みつくら」編集委員会
花巻市石鳥谷町大瀬川10-45-2
大瀬川振興センター 電話45-6472

“お～い!集まろう!創ろう!みんなの大瀬川!”

たんぼの会で「いきいき講座を開催」

年2回長寿福祉課が開催している「いきいき講座」が7月22日にたんぼの会（菅原文子会長）の14人が参加して第九区自治公民館で行われた。石鳥谷総合支所の伊藤保健師さんが講師で「毎日の活力はここから」と題し、人生における介護予防のアドバイスについて話された。「まず現状として、花巻市は人口（令和7年9月現在）87,900人（39,195世帯）で高齢化率が35.64%、石鳥谷地域は12,595人（5,338世帯）で38.6%、実に2.5人に1人が65歳以上の高齢者となっている。これからは人生100年時代を目指し、自立した生活ができる環境が必要となります。そのためには加齢に伴う心身の活力が低下する『フレイル』状態を少なくするためにも誰かとつながって孤独感をなくし、『一日一笑』を心がけ、3食しっかり食し、社会参加や適度な運動時間を作ってほしい」と語った。楽しい脳トレ体操では、参加者から「アー思った通りでない!!」と笑い声が出ていた。ひと休みして行なった座位の「元気でまっせ体操」でも、「久しぶりに（体操）したね～」と会話が弾んでいた。

曇天のなかでの草刈り

下大瀬川美土里の会（熊谷俊彦代表）は7月25日、56人が参加して第3回の草刈り作業を実施した。作業前の朝礼で事務局から、「雨続きで足下が滑ることから、怪我をしないよう十分注意してください」との注意喚起がなされた。今回も自作農地の畦畔の草刈り作業となったが、設置済みの恒久電気柵の下草が伸びて電線に触れ、漏電して電圧が下がっていたため、執行部を中心に電気柵の下草刈りを実施した。富沢橋から大瀬川橋までの恒久電気柵設置について熊谷代表から、「延長約900mの内、これまで県が500m設置しました。残りについて地元が約260m、県が約150m設置します。地元設置部分は8月20日、21日に実施するので、九区の若手中堅を中心に結成された電柵ネットワークを中心に、皆さんの協力により対応したいのでよろしくをお願いします」との要請があった。構想から3年を経て恒久電気柵設置

もいよいよ完成が見えてきた。

一方、多面的機能支払交付金の対象農用地の変更に伴う臨時総会（書面議決）開催結果について、構成員144名中124名が書面議決を提出し、全員の賛成で可決された旨が報告された。

水と環境保全の大切さを学習

葛丸の農村環境を守る会（板垣幸夫会長）は7月25日、大瀬川構造改善センターで親子環境学習会を行い、役員や子供会の親子23人が参加した。講師に岩手県環境アドバイザーの佐井守さんを招いて、環境の保全と水資源の大切さを学習した。佐井先生は葛丸川を詳しく調査しており、様々な生物標本も持参していた。葛丸川の水質はAクラスで、川遊びにも適しているとの評価だ。水の循環システムの説明で日本は国土が狭く、山から海に流れ込む川の長さが短い世界でも珍しい特徴があり、相対的に水質が綺麗に保たれているとのことだった。

熊の話題にも触れ、熊による人身事故は報道が多くなり被害が増えていると感じているかもしれないが、令和7年は令和2年の半分になっている。熊の生態は、まだまだ分らないことが多く今後の課題になっていると話していた。また、先生は花火師でもあり、打ち上げ花火の尺玉（直径30cm）の模型を見せてもらったほか、熊除け用の爆竹10本を試験的に外に向けて鳴らした。大瀬川地区子供育成会会長の熊谷純さんから「今日は身近な自然の中にも素晴らしい生物が居ることを学び、大変勉強になりました」と感想があり、こどもたちは大きな袋に入ったおやつを貰って解散した。

写真展に板垣さんが出展

盛岡市の「プラザおでつて」で7月17日から3日間にわたって開催された会員13名による第21回フォトイズム写真展に板垣弘清さんの作品が出展されたので、板垣寛さんと菅原富男さん、菅原得之さんが鑑賞した。

今回の写真展は会員各自がテーマを決めて、割り当てられた2m40cm四方のスペースに組み写真を展示したものだった。板垣弘清さんのテーマは「限界集落」。県内各地で撮影した大小14枚の写真が組み合わされていた。その中の一枚に安部力男さん（船台家）の一休みしている写真があった。自然の情景や母屋などと組み合わせられた安部さんの顔の、なんとも言えない侘しさは、まさに「限界集落」そのままを醸し出しているようだった。いづごろ撮影された写真なのかは分からないが、安部力男さんは平成20年に亡くなっている。

戦争当時の思い出

今年も終戦記念日がやって来る。これを機会に「戦争の思い出」を記したい。以下は昭和56年11月7日に発行した英霊銘々碑建設記念誌から抜粋。

○軍隊生活の思い出 板垣要一（※長助電家）

私は四年二ヶ月間兵隊に行って参りました。昭和15年に

兵隊検査を受けて翌年の十六年八月一日に青森第八師団第二十三部隊に入隊しました。結婚して4ヶ月目でした。すぐに満州に行きました。朝鮮の釜山から上陸し、その時秋田県出身の上等兵と二日民家に泊りました。それから汽車に四日半乗りました。向こうの汽車は、日本の汽車の二倍位大きくて驚きました。ゆけども大草原を走り続けました。着いた所は満州の黒河省という所でした（今の中国です）。そこは黒龍江を境に向こうはソ連でした。ここで国境の警備をしました。そしてその年の十二月八日に大東亜戦争が始まりました。生きて帰れるなどとはとても考えられませんでした。冬はとても寒く、零下四十度が普通でしたし、夏は四十八度（※華氏。摂氏では8、9度）で北の国では夏と冬だけの様な気がしました。また、夜の歩哨はさらに辛い思いをしました。夜明け近くに聞こえて来るオオカミの遠吠えは、背筋の凍るような寂しさで、今思い出しても身震いします。

軍隊とは昔の人が言うとおり、名誉ある監獄のような所でした。戦争は人間を狂わせます。戦争が激しくなり、弟の節郎はフィリピン島で戦死をし、次の弟の昭三郎は予科練に行き、家のことを思うと、居ても立ってもいられませんでした。現在兵隊から生き帰って、妻、子供、孫一家七人、毎日が平和で、精神的にも物質的にも恵まれ団楽できる幸福は、戦死した方々に対して深く頭の下の思いでいっぱいです。ここに戦死した方々の忠魂碑を再建することは大変意義のあることと思います。いつまでも子孫に伝えていくことは、私たちの使命であります。

訃報

それはあまりにも突然でした。九区の菅原ヤエ子さん（堰端）は、7月14日に勤め先で倒れ救急車で花巻市内の病院に運ばれました。容態が落ち着いたため翌日再検査の予定で帰宅したものの、自宅で倒れ救急車で中部病院に搬送されましたが帰らぬ人となりました。78歳でした。

菅原さんは、紫波町平沢の的場のお生まれで、豊勝さんと結婚後は、町内の高重石油に勤め、昭和50年からは花巻温泉近くの藤原クリーニングに亡くなるまで勤めていました。夫の豊勝さんが長年冬場に県外の造り酒屋に勤めていたため、様々な用事のほか、雪が降れば長い進入路や屋根から落ちた雪を一人で雪掻きをして家を守っていました。また、平成15年に石鳥谷町婦人消防協力隊第2分団第1部部長の他にも様々な活動に参加しており、特に「たんぼの会」では、長年事務局や会計を担当され行事に参加出来ない会員達を率先して送り迎えを行なったり、大澤竹次郎顕彰会の編集にも携わっていました。趣味の中では、特に「山」が大好きで、一人で春の山菜や秋のキノコを取ってきてお裾分けを頂いた方々も多いと思います。また、山野草も好きでお庭には色々な花々が咲き、訪ねるとすぐに「これは・・・の花よ」と教えてくれました。いつも明るく朗らかでした菅原さんに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。